

9月21日（月）ヘブル人への手紙4章12節

「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」

これは非常に有名なみことばですから、一度くらいは聞いたことがあるかもしれません。しかしあらためてこのみことばを読んでみると、11節とのつながりの中で読むのが適切であることが分かります。11節に「ですから、だれも、あの不従順の悪い例に倣って落伍しないように、この安息に入るように努めようではありませんか。」とありますが、実際に荒野をさ迷ったイスラエルの民に対しては「けれども彼らには、聞いたみことばが益となりませんでした。みことばが、聞いた人たちに信仰によって結びつけられなかったからです。」（2節）と言われているとおり、みことばが信仰によって結びつけられなかったことが不信仰の原因であり、その結果として約束の地カナンに入ることができなかったのです。私たちが、不従順の悪い例に倣って落伍しないためには、神のみことばに親しみ、神のみことばを用い、それに聞き従わなければなりません。

神のことばの特徴は生きているということです。生きて、自由に働き、最終的に必ず神のみこころを成し遂げます。そして力があります。みことばの力強さは、信じる者を作り変えて新たにします。「両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き」ということです。これは、私たちの最も深い内面にまで切り込み、すべてをさらけ出すことができるということです。その上で「心の思いやはかりごとを見分けることができます。」と言われています。

私たちがみことばを聞く時に、みことばが心の奥深くに入り込んで、今まで自分が意識しなかった罪を明らかにされた経験はありませんか。また剣で刺し貫かれるような痛みを心を感じたことはありませんか。それが、まさにみことばの働きです。そのようにして示された罪があるなら、私たちは決して放っておかないで、すぐに悔い改めなければなりません。罪を悔い改めないことがまさに不従順の姿であり、荒野をさ迷ったイスラエルの民の姿そのものです。もしみことばが聞いた私たちに信仰によって結びつけられず、私たちがみことばにふさわしく応答しなければ、聞いたみことばは生きて力強く働くこともなく何の益にもならないのです。

9月22日（火）ヘブル人への手紙4章13節

「神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」

12節には「神のことばは — 心の思いやはかりごとを見分けることができます。」とあります。さらに13節には「神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。」とあります。もう一度私たちはイスラエルが約束の地に入れなかった理由を考えるなら、それは、心がかた

くなであった（3章8節）「彼らは常に心が迷っている。彼らはわたしの道を知らない。」（3章10節）「不信仰のため」（3章19節）というようなことでした。つまり、イスラエルの民の内面の問題、心の問題ゆえに彼らは約束の地に入れなかったのであって、「心の思いやはかりごとを見分け」「神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されている」ので、神は隠れたところも知っておられて、そこにもさばきを下された結果だったのです。

そして、当然神様は私たち一人一人のこともよくご存知で、神の前に隠れているものは何もありません。その上で神様はみことばを与えて、時には私たちの罪を明らかにして悔い改めを促そうとしたり、ある時にははっきりとみことばにより従うべき道を示そうとされることがあります。しかし私たちの側で、心を頑なにして不従順であったり、罪を悔い改めず、罪がそのまま残ってしまうなら、最後に私たちは神様の前に立たされる時が来た時に、私たちは神の御前に悔い改めなかった罪について申し開きをしなければなりません、もちろん私たちは自分の義を主張して言い逃れをすることはできません。そして、この神の御前に立つ時が来るとの信仰が、私たちをして心の中に神への恐れを抱かせ、自らを謙遜にさせ、みことばに従い、神の御前に聖く歩ませようとする動機となっていくのです。そのためには常に与えられるみことばにより自分の内側を点検しながら、主の前に正しく歩まなければなりません。そして私たちは、赦されて義とされた者として恐れなく平安のうちに主の御前に立たせていただきたいと思わされます。

9月23日（水）ヘブル人への手紙4章14節

「さて、私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。」

イエスが大祭司であるということについては、2章17節で「あわれみ深い、忠実な大祭司」と言われていますが、4章14節で「さて」という接続詞をもって再び「神の子イエスという偉大な大祭司」のことについて説明がなされます。まず「もろもろの天を通られた」とあります。このことについては様々な説明がなされていますが、イエスは何の障害もなく、またとがめられることもなく、神の臨在の御前にまで通っていかれたことを示しています。9章24節「天そのものに入られた」1章3節「大いなる方の右の座に着かれ」たことがそのことを表しています。それは、イエスが神の御子であり、イエスは何の罪もないお方だからです。次に、「偉大な」とはイエスが他の祭司にまさることを意味していて、イエスが比類なき大祭司であることを示しています。そして、その偉大さは、救いのみわざにまで及びます。三つ目に、神の子イエスとあります。ここでイエスは、人となられた神の御子であることを明らかにすることにより、さらに、その偉大さが強調されています。

そして「信仰の告白を堅く保とうではありませんか」とありますが、「私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられる」ということが、信仰の告白を

保つ根拠となっています。それは、このイエスを通して私たちは安息に入ることができるからであり、イエス様の存在が私たちの信仰の確信となりうるからです。私たちにとりましても、信仰の拠り所はイエス様しかありません。どんな中にありましても、もろもろの天を通られた、偉大な大祭司である神の子イエス様を見上げつつ歩ませていただきたいと思わされます。

9月24日（木）ヘブル人への手紙4章15節

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでしたが、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」

新改訳聖書には訳出されていませんが、15節の冒頭には「なぜなら」と訳し得る接続詞が出てまいります。これは、私たちが信仰を堅く保つべき理由であったり、私たちの信仰の根拠であり、信仰の確信である大祭司イエスについてのさらなる説明を与えようとしています。

まず、「私たちの大祭司であるイエスは、私たちの弱さに同情できない方ではありません。」とありますが、ここで言われているまず一つのことは、イエスは同情されなければならない弱さは持っていないということです。もし仮にイエスが、同情されるべき弱さを持つ存在ならば、弱さを持つ者に対して同情する資格や立場にはないからです。しかしその一方でイエスはそのような弱さの一切ないお方であるにもかかわらず、私たちの弱さに同情してくださるお方だということです。それは、イエスが弱さがないにもかかわらず、あわれみ深いお方だからです。

さらに弱さに同情してくださる理由としては、「すべての点において、私たちと同じように試みにあわれた」とあります。これと同様なことが2章18節においてすでに言われています。まず2章18節で明らかにされていることは、自ら試みを受けて苦しまれたという事実です。さらに4章15節では、試みは私たちと同じようなものであり、それがすべての点に及んでいることが明らかにされています。このような試みにあわれた経験を持つイエスが私たちの弱さに同情してくださることに、私たちは大きな慰めを経験します。

そして、大きな問題は「罪は犯しませんでしたが」ということです。ここで私たちが気をつけるべきことは、試みにあうこと自体は罪ではないということです。そしてイエス様はすべての点において、私たちと同じように試みにあわれましたが、罪を犯されませんでした。罪を犯されなかったイエス様は、原罪も含めて罪をほかにして私たちと同じ人となられたお方です。ですから、罪なきイエスが罪を犯すはずがないのだから、試みの中で罪を犯す私たちのことを理解できないという方がおられます。しかし、罪を犯すことについては、どうあっても言い訳はできません。むしろ、イエス様は罪は犯されませんでした。弟子に裏切られ、無実の者が訴えられて有罪にされ、人からねたまれて憎まれ、ののしられたり、あざけられ、そして罪なきお方が、すべての人の罪をその身に負い、罪人として十字架におかかりになり、父なる神から捨てられる悲しみを経験し、少なくともイエス様はこれだけの試みにあわれたのです。私たちも試みにあう中で、さまざまな苦悩を経験しますが、すべての点において、私たちと同じように試

みにあわれたイエス様は、そのことについて深く同情してくださるお方です。この方が私たちの大祭司であってくださることに心から感謝いたしましょう

9月25日（金）ヘブル人への手紙4章16節

「ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

ヘブル人への手紙の著者は、「もろもろの天を通られた、神のイエスという偉大な大祭司がおられることの恵みとして、すべての読者に「大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」と呼びかけています。ここで言われている大胆さとは、恐れからの解放と自由な交わりです。このように私たちは神の恵みを受けつつ、恵みの御座に大胆に近づくことができます。御座とは王位のことです。本来であれば、王位に座する者の権威のゆえに、恐れをもって御前にひれ伏さなければならないのですが、父なる神は、ご自身の御座を恵みの御座にしてくださり、そこから恵みを豊かに与えてくださるのです。私たちは、信仰によって、「あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために」私たちは常に喜びと感謝をもって、自ら進んで恵みの御座に近づきたいと思わされます。そして、その御座の右には、あわれみ深い、忠実な大祭司（2章17節）イエス様がおられ、そのお方が神の御座が私たち主を信じるすべての者にとっての恵みの御座であることを保証してくくださるのです。キリストの十字架で流された血によって罪を赦された者として、またイエス・キリストのとりなしにより、いつでも恐れなく私たちは神様のもとに近づくことができるのです。

そして、「折にかなった助け」ですが、折にかなったとは、最もふさわしい時を意味しています。神の助けが御座から与えられるのは、私たちにとっての最もふさわしい時ではなく、神にとっての最もふさわしい時です。そして、そのように神の側での折にかなった助けを受けることが私たちにとっての大きな祝福であり、幸いなのです。神は、信仰をもって大胆に恵みの御座に近づく者には必ず折にかなった助けを与えてくださると信じて、今日も恵みの御座に大胆に近づきましょう。

9月26日（土）ヘブル人への手紙5章1節

「大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。」

1節には旧約時代の大祭司の務めについて述べられています。大祭司は、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕える働きをします。言わば大祭司は、人々の代表と言えます。その一方で、選ばれた大祭司は任命されます。すなわち、大祭司は人々の投票や互選で選ばれることで任命されるのではなく、神がご自身の権威をもって選び、油注ぎをもってその人を大祭司の働

きに任命されるのです。主は、大祭司だけではなく、王や預言者でも主に仕える働きはどんなものであっても、ご自身の権威をもって召し、任命されるのです。

そして大祭司の大切な役割は、「ささげ物といけにえを主に献げる」ということです。そして罪のためのささげ物といけにえを主に献げることは誰にでもできることではなく、大祭司にゆだねられた大切な働きでした。ですから、もし大祭司がいなければ、罪のためのささげ物もいけにえも神に献げることができませんから、旧約時代のイスラエルの民の罪は、そのまま残ることとなります。ですから、大祭司を主が人々の中から選び、その者を任命したということは、主なる神様のイスラエルの民に対するあわれみであり、恵みであると言えます。そして、私たちには、「もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司が、与えられ、罪が赦され、その血により罪からきよめられる道が与えられていることに心から感謝しましょう。

9月27日（日）ヘブル人への手紙5章2，3節

「大祭司は自分自身も弱さを身にまわっているのに、無知で迷っている人々に優しく接することができます。」（2節）

大祭司は、神によって選ばれた特別な存在であったと言えます。そのような地位や立場のゆえに、人を見下したり、傲慢になるのではなく、無知で神の道から迷っている人々に優しく接することが求められていました。大祭司という神によって人々の中から神に仕えるように、すなわち罪のためのささげ物やいけにえを献げるように任命されているがゆえに、大祭司は自分の弱さ、特に「自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げ」なければならない時に、自分の罪深さを深く思わされたことでしょう。教会の中でも、人々の中から神に選ばれ、人々のために神に仕えるように任命された者たちがいます。それは、牧師、役員、C S 教師などです。私自身も含めて、お一人おひとり、いつも何を思って奉仕にあずかっているのでしょうか。それは、自分の弱さであり、罪深さではないのでしょうか。大祭司は自分のためにも罪のゆえにささげ物を献げなければなりませんでしたが、私たちのためには、大祭司であるイエス様が、その血をもって私たちの罪を赦してくださっています。そのことを信じ、また罪が示されたなら真実な悔い改めをもって罪を赦していただき、常に主に赦された者として主と主の教会に仕える奉仕にあずかせていただきましょう。

大祭司の大切な働きとして無知で迷っている人々に優しく接するということがありました。このことは、神が無知で迷っている人々に対して優しく接していることを私たちに教え、主は決してそれらの人々を無視するようなお方ではない、それどころか神はそれらの人たちに深い関心を寄せておられ、大祭司に優しく接するように命じておられる方だということが分かります。そして、神はこのことを今もご自身のみこころとしておられます。私たちも無知で信仰的に迷っている人々にどう接しているのでしょうか。そのような人々を大切に作る教会となってい

るでしょうか。私も牧師として無知で迷っている人々に優しく接する者でありたいと思わされます。